

## リウマチ通信

Vol. 13

平成 27 年 5 月号

## リウマチ教育入院について

- 短期間の入院中に、リウマチの症状や治療を多角的に見直します。
- 発症早期の患者さん、手術を検討中の方、病状のコントロールが難しい方、治療方針を見直したい方、リハビリを受けたい方などが対象となります
- リウマチ以外の持病の治療がおろそかになっている方には、入院中に検査や専門外来の受診を行い、健康管理全般について検討します。
- 入院日程については、ご希望や病状によって対応します。表は2泊3日の方の例です。

詳しい内容をご希望の方は、医師/看護師/地域連携室へ。

1日目	2日目	3日目
関節機能評価	栄養指導	装具診
関節超音波	整形外科受診	リハビリ
リウマチ体操	リハビリ	薬剤指導
骨レントゲン	医療ソーシャルワーカー相談	医師によるまとめ

リウマチ患者さんを、全面的にサポートしていくために、医師、看護師、薬剤師、リハビリ療法士、医療ソーシャルワーカーが一丸となって取り組みます。



(文責 医師 駒野 有希子)

## 病診連携について

病診連携、病病連携ということばを御存知でしょうか。患者さんが病院と診療所、もしくは2つの病院に通院する場合に病院と診療所、病院と別の病院が患者さんの情報を共有して、スムーズにしっかりとした間違いのない診療をしましょう、ということで昨今その重要性が叫ばれています。しかしながら、十分な診療情報を共有しながら診療に当たれている場合のほうが正直少ないのではないかと思います。当リウマチセンターでは、患者さんが他の診療所や病院に通院している場合、わくわくバインダー（お持ちでない方も間もなくお渡しします）の表紙にあたる患者情報シートを、診療所・病院の先生にお渡しすることにいたしました。これによって、当院での診療の状況、リウマチの状態、そして患者さんのもっておられる他の病気や問題になる病状を一目でわかるようになります。患者情報シートは1年に1回の更新ですが、それでも患者さんの病状把握が格段によくなることと思います。患者さんの中には複数の病院にかかることは悪いことだと思っておられるかたもおられるようですが、決してそんなことはありません。家庭医と専門医が連携して治療にあたるのが理想的な医療形態だと思います。

当院では、地域の診療所や各医療機関との連絡調整を図るバイパス役として地域医療連携室があります。患者さんが安心して治療継続ができるように、お手伝いさせていただきます。

何か不安なことがあればご相談下さい。



(文責 医師 大村 浩一郎  
地域医療連携室師長 下坂 るみ子)